

島根の「山灯籠」の謎を探る

林 秀 樹

1. 島根の石灯籠と山灯籠

灯籠とは、日本庭園辞典(岩波書店)によれば、飛鳥時代に仏教とともに、仏堂前の献灯として日本に伝来したという歴史ある照明具である。

庭園に石灯籠が広く用いられるようになるのは、茶庭である露地が成立した桃山時代以降といわれている。

島根県では、来待石や福光石などの軟石が多く産出されている。特に来待石は、松平直政公が松江藩のお止め石として藩外への流出を禁止し、松江藩の特産品「出雲石灯籠」として、全国各地の庭園の主要な素材として活用された。(写真1)



写真1 来待石 雪見灯籠

来待石などの軟石は、加工が容易であることから、現在でも、様々なデザインの灯籠が作り出されている。特に出雲地方の庭園や社寺仏閣には、来待石灯籠はなくてはならないものとなっている。

今年は、津和野の登録文化財となっている庭園を中心に調査したが、それぞれの庭には整形型の石灯籠が、配置されていた。(写真2)



写真2 津和野町文化財庭園

しかし、県内には、来待石や福光石などを加工した石灯籠ではなく、自然石を加工せず、川や海、野山の転石をそのまま利用した山灯籠が散見される。

仕事を県内各地を歩くと、路傍には

記念碑の石柱、石地藏などの多くの石像物を発見することが多い。

一畑薬師の名が彫り込まれた山灯籠は、島根県東部の道端に建立されており、私が調査した灯籠の数は50基を超えている。現在は、ほとんど人も通らない山道にひっそり立っている灯籠もあることから、もっと丁寧に探せば、その数は100基以上になるのではないかと考えている。(写真3)

また、山灯籠は、路傍にぽつんと立っているものが多いが、時折ではあるが、県内の庭園内にも山灯籠は建立されている。神社の入り口でも見ることができる。

山灯籠はなぜ造られたのだろうか。

路傍に建立されている一畑薬師の山灯籠のすぐ近くには、来待石の整形された石灯籠が設置されている社寺仏閣がある。そのことから考えても、来待石灯籠の輸送が困難であるとか、山灯籠を建立した周辺に、形のよい自然石が散乱しており、石材の入手が容易だという理由ではないと思われる。また、山灯籠は、不安定であり、その据え付けも困難を極めるのではないだろうか。わざわざ、据え付けが困難な山灯籠を建立の謎を探ってみたい。



写真3 一畑薬師山灯籠

2. 山灯籠建立の謎

一畑薬師の山灯籠には、灯籠の竿に建立した年が、建立した人とともに彫り込まれていることがある。読み解けないものも多いが、多くは明治、大正時代初期のものが多い。調べていくと、山灯籠は、来待石などを加工した石灯籠の歴史より新しいことが解ってきた。

山灯籠とは、どのようなものだろうか。日本庭園辞典(岩波書店)から転記する。

自然石自然石を積み重ねて作った石灯籠。「化灯籠」とも呼ぶ。

基礎・竿・中台・笠・宝珠は加工しないが、火袋については、人工的に穴をあけることが多い。

江戸時代の末期頃からよく用いられた。日本庭園辞典(岩波書店)



写真4 卜蔵庭園 山灯籠

一畑灯籠以外、山灯籠はどんな場所に設置されているのだろうか。庭園文化研究分科会での出雲流庭園の現地調査では、数は少ないが、山灯籠が配置されている庭園を数カ所確認している。

奥出雲町竹崎の卜蔵(ぼくら)庭園(写真4)は、一度、廃園になった庭を少しずつ復旧している途中の庭園であるが、その中心には山灯籠が据えられている。



写真5 原鹿 旧豪農屋敷庭園
整形型の石灯籠

斐川町原鹿の旧豪農屋敷庭園(写真5)は、出雲流庭園の典型と言われる庭である。庭園内には多くの石灯籠が据えら、そのほとんどが来待石の整形させた灯籠である。そんな中、木陰の一角にひっそりと山灯籠が据えられているのを見ることができる。

出雲流庭園は、この地方の豪農や豪商が金に糸目をつけずに築庭したものである。そのため、雲龍型のクロマツ

の大木や長大な延べ石をはじめとする巨大な庭石が据え付けられている。華麗とも言われる豪農屋敷庭園の北隅に、ひっそりと山灯籠が配置されている。(写真6)

豪農たちの資金力を考えると、もっと大きな山灯籠を立てることもできたと思うのに、高さも低く、その規模は小さい。

写真6 園内の山灯籠

一畑灯籠や庭園内の山灯籠以外で、これまでに確認している神社の山灯籠を見てみたい。写真(7)は、松江市浜乃木の野代神社入口である。鳥居の両側には自然石でできた大きな山灯籠が立っている。写真(8)は、松江市大庭町の神魂神社の手水場付近の山灯籠である。自然石階段の参道の下に設けられている。



写真7 野代神社灯籠

写真(10)は、ホーランエンヤ神事で名高い松江市東出雲町の阿太加夜神社である。山門の前に来待石の出雲狛犬があり、その手前に山灯籠がある。なぜか、その手前には、整形された石灯籠もある。



写真8 神魂神社 山灯籠

他の県内の神社を見てみると、本殿ある境内地には、狛犬とともに春日灯籠などの整形された石灯籠がある。どの神社でも同じである。写真(9)は、阿太加夜神社の全景であるが、山門をくぐって入った境内の石灯籠は、すべて加工し整形されている。



写真9 阿太加夜神社拝殿、本殿、荒神社のある境内は、整形された来待石灯籠が並ぶ



写真10 山門入口

神社山門の外
 ・来待石の狛犬と整形型の石灯籠
 その間に
 ・自然石を積み上げた山灯籠

私は、研究部会の活動で数多くの日本庭園を調査し、園内には数多くの石灯籠を見てきた。それらの石灯籠のほとんどは整形され、デザインされた春日灯籠や雪見灯籠であった。

島根県は、「やはり石灯籠の産地だ。」、来待石などの加工・整形された石灯籠が庭園や社寺ふんだんに使われているのはその証拠だと思ってきた。

しかし、整形型の石灯籠と山灯籠の使い分けに、きちんとした意味があると考えた方がよいかかと、最近思い始めた。路傍にぽつんと立っている一畑薬師灯籠を調べ始めて気がついた。なぜ路傍に立っている一畑灯籠のデザインは、すべて自然石を利用した山灯籠となっているのか。一畑薬師の山灯籠は、一畑薬師近郊の出雲市や松江市はもとより、大田市三瓶町、大田市久手町、飯南町赤名、雲南市掛合町など広範囲にわたっている。大きさも様々で、デザインも異なる。共通点は、自然石を自然の姿のまま作り上げる山灯籠であるという点だけである。

3. 山灯籠は結界のシンボル



写真 11 神域を示す鳥居の外の巨大な山灯籠



写真 12 一畑薬師の寺域内の整形型石灯籠群

「庭」の定義をひもとくと、一般的には、木や草花を植え、池泉を作るなどして造ったりして、広がりや情趣を添えるいわゆる庭園をあらわす。

そのほかに「学びの庭」や「裁きの庭」という言葉があるように、かつては神事や公事の行われる場所などの空間を示したと言われている。

寺院には結界石を立てることがある。寺域や修行場などの境界を示す石である。

社寺仏閣の山灯籠は、単なる献灯の意味だけでなく、寺域・神域との領域の外であることを示すものではないか。写真(11)の野代神社の山灯籠は、鳥居の外であり、神域外を示すシンボリックなものではないだろうか。

一畑薬師に行くと、参道の両側に見事な石灯籠群が続いている。山灯籠の姿は見当たらない。

各地の路傍に立っている一畑薬師の山灯籠は、寺域の外を示すシンボルではないか。石柱に「右〇〇道」と書かれているものもあり、「参拝のための道しるべ」と考えると分かりやすい。

4. 庭園内の山灯籠は自然域のシンボル

庭園作庭の技法に「草庵」というものがある。都市の中の林に隠れ住むという概念を具体化した



普門院茶室
山灯籠

写真 13

もので、庭園内に草葺きの粗末な家をしつらえ、「草庵＝市中の山居」と称した。町の喧噪や世俗を離れた山里などの環境を好意的にとらえ、ひそやかで侘びたたたずまいに美を見つける手法である。

松江市の普門院や安来市の蓮乗院の茶室は草庵風で、その露地には、山灯籠が据えられている。



写真 14 清水寺蓮乗院
茶庭・山灯籠

鏡の池で名高い松江市の八重垣神社宮司邸の庭には、大きな山灯籠が据えられている。(写真 15) 表座敷からみて南隅に配置され、このエリアは庭園デザイン的には、奥深い森を表している。

原鹿豪農屋敷庭園の山灯籠も北隅に配置されており、これより奥は、庭園外であることを示していると思われる。(写真 6)

庭園内の山灯籠は、山里(自然)との領域界を示し、囲まれた庭の空間領域のシンボルである。(以上)



写真 15 自然域を示す
巨大な山灯籠